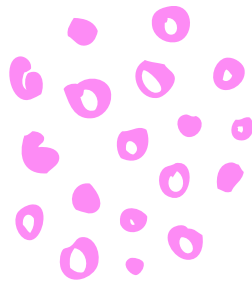
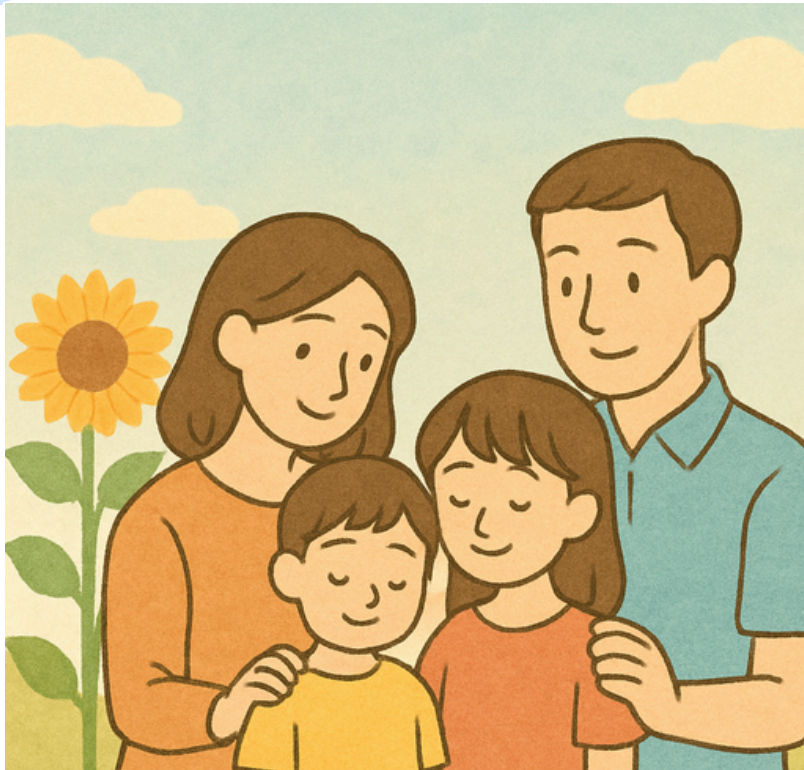


ゆりいか通信

第16号

令和7年 8月



次の一步を探す、夏の午後

夏休みも中盤になると、家の中のゆったりとした時間があたりまえになってくる。家庭も多いのではないだろうか。朝、目覚ましの音が鳴らない日が続くことに、最初は少しほっとしていたのに、いつの間にかそれが日常になっている。子どもが学校に行っていないなくても、特別な予定がなくても、親子でなんとなく過ごせてしまう——そんなところに、夏休みの魔法を感じます。

けれど、8月のカレンダーを見つめるたびに、学校が始まる日が少し気になってくる時期でもあります。「毎日が夏休み」という言葉は夢のような生活を指すようですが、学校に足が向かない子どもたちにとっては「毎日が夏休み最終日」のように感じられるそうです。もし、毎日が「夏休みの終わりを意識する日」だったならそれはきっと、落ち着かない時間が続くことかもしれません。

保護者にとっても夏休みの終わりが近づいてくると、「今度は行けるのだろうか」「学校行事には参加できるだろうか」と、さまざまな思い

が巡ります。心の中が『学校』のことについていっぱいになってくると、親も子ども次の一歩を踏み出しにくくなります。学校は単純に「行っても行かなくてもいい所」と言い切れるものではないかもしれませんが、学校から少し離れている時間を、子どもの育ちに活かせるようにできれば、それは大きな力になります。

夏休みが終わった後、学校に行けるかどうかは別として『学校』を子どもが持つ資源のひとつと捉えてみてくださいます。広い視点で社会を見てみると、子どもが育つ場は、フリースクールや図書館など意外とたくさん見つかるかもしれません。

夏の終わりに向かうこの時期、お子さんを新たな目で見つめ直し、「どうすればこの子が幸せに育っていけるだろうか？」と自分に問いかけてみてください。『ふつう』という育ちにとらわれず、私たちの小さな一歩を、この夏のあいだに見つけられますように。

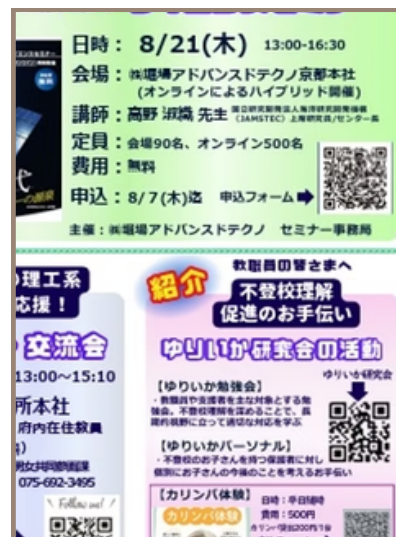
恩庄 香織

Our Activities

高等学校コンソーシアム京都（略称・高校コンソ）さんの広報誌『Career』に、ゆりいか研究会の活動を紹介していただきました。高校コンソさんは京都市立高等学校と産業界および大学との連携を推進し、「広い世界に羽ばたこうとする高校生が存分にその力を発揮できる機会と場所を提供」しておられます。（※のサイトより引用）

詳しくはwebサイトやインスタ、フェイスブックで検索してご覧ください。

広報誌「Career」に紹介掲載



カリンバ体験

【保護者・支援者・若者向け】

ゆりいか研究会では、学校に行っておられないお子様とそのご家族を対象としたカリンバ体験会、また教職員および支援者向けの力リンバ体験会を行っております。詳細については市立図書館や京都市適応指導教室「ふれあいの杜」に置かれております案内チラシ、もしくはゆりいか研究会のウェブサイトをご覧ください。

また、先にどんなものか見てみたい、触ってみたいという方のために、随時力リンバ体験は行っておりまして、ご関心がある方はぜひ平日午後「こりす西陣」までお越しください。

お待ちしております。

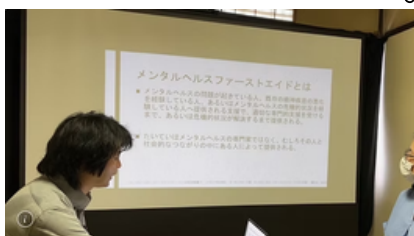


フラッペ

7月のフラッペでは、「メンタルヘルス・ファーストエイド（メンタ）」をテーマにとりあげました。講師には、京都府精神保健福祉総合センター相談指導課の高田亮先生をお迎えし、精神疾患の早期サインや、思春期の子どものうちに表れるメンタルヘルスの不調について、わかりやすく丁寧にお話しいただきました。

メンタルヘルス・ファーストエイドとは、こころの問題を抱える人に対して身近な存在が初期対応を行う「こころの応急処置」です。今回紹介された「りはあさる」の5原則は、専門知識がなくてもすぐに実践できる支援の基本姿勢として、参加者の心に深く響きました。

8月のフラッペは残念ながら中止させていただきました。ご予定いただいた皆様には申し訳ありませんが、またの機会にお会いできることを楽しみにしております。よろしくお願いいたします。



Upcoming Events



ゆりいか勉強会

8/23

今回は中島陽大先生をお迎えして、学びを深めます。テーマは「睡眠」です。



フラッペ勉強会・交流会

8/24

～ 中止 ～



わいわいギャザリング

9/13

カリンバをさわってみたり、ボードゲームをしたりして過ごしましょう。



フラッペ勉強会・交流会

9/21

「不登校の子どもの将来設計」というテーマで、お話をしたいと思います。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◇ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

先月に引き続き、宮美遊さんの園芸コラムです。

オクラが教えてくれたこと

去年のゴールデンウィーク、園芸店でオクラの苗を買った。黒いポットには三本植えられていた。家に戻ると早速プランターに二〇センチ間隔で一本ずつ植えた。インターネットで調べてみるとオクラの根は繊細なのでばらさずに三本をまとめてそっと鉢に植えると良いということだった。慌ててプランターの苗を一箇所にまとめて風で折れないように支柱を立てた。風

おくと十センチになり、硬くて食べられない。毎日二、三本取れるので収穫しては、うどんの茹で汁にくぐらせた。丼であらかじめ練っておいた納豆に黒酢味のもずくを入れ、少し冷ましたうどんを混ぜる。熱々のうどんだと納豆菌が死滅して効果が薄れるからだ。気分を変えたいときは、白菜キムチを上に乗せると色鮮やかで食が進む。発酵食品の健康料理だ。

通しが良く、日当たりの良い場所に置いたのですくすく育った。オクラの成長は驚くほど早い。茎と葉っぱのでている茎の間にでてくる新芽を手でとる。これはミニトマトでも経験済みだ。この脇芽掻きは私の園芸心をくすぐる大切な作業だ。数日すると月見草の様な鮮やかな黄色の蕾が顔を出す。その蕾が翌日には朝顔の花の大きさになる。その花は一晚でオクラになる。二、三センチのオクラはとても可愛い。五、六センチに成ったら食べ頃だ。一日放って

オクラ栽培は虫もつかず手入れも楽だ、そう思い今年は四月中頃苗を買って植えてみた。ところがである。気温が低い為に全く背丈が伸びない。去年は水やりのたびに背が伸び、葉が広がる様子が楽しみで仕方なかったのに今年は、鉢の前でため息をつく毎日。もう枯れてしまふのかと心配になった。調べてみると、植える時期は五月に入ってからと分かった。又去年と同じ土だと連作障害を起こすと書いてある。慌ててプランターから深底の鉢に植え替えた。

オクラは真っ直ぐ下に根を生やすと書いてあるので深底の鉢にしたのだ。七月に入ってからと黄色の蕾を付けて元氣良くなってきた。だがまだまだ安心出来ない。七月九日やっと今年初めての一本目を収穫した。大きさは五、六センチで食べ頃には丁度いい。去年は簡単にはスクスク育ち、オクラも五、六十個取れたのに今年は背丈も短くオクラは一、二個なのが不思議だ。園芸は本当に奥が深く、難しいものだと思つづく実感した。

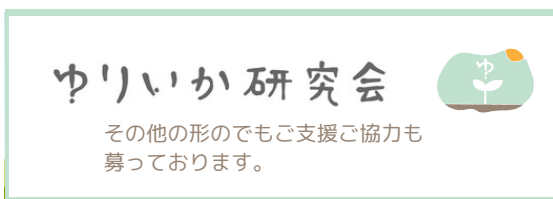
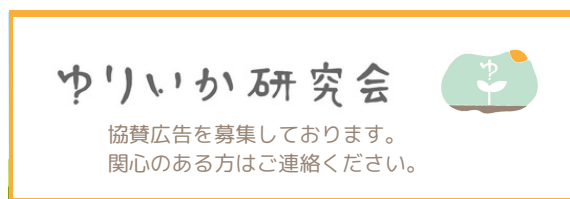
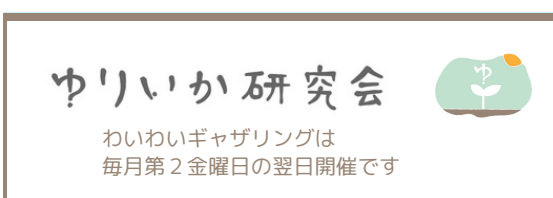
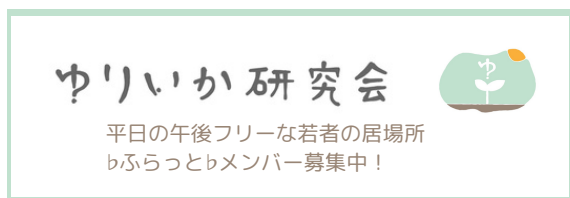
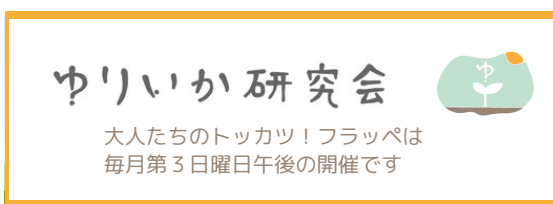
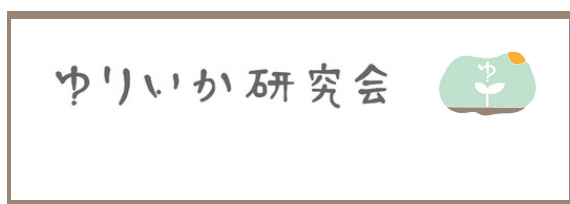
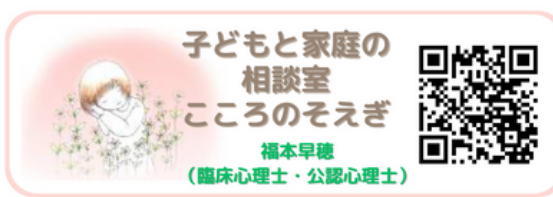
植物は時期と温度が重要である。植物によって手入れが異なる。幾つになっても勉強だ。失敗も含めて、植物と過ごす時間は宝物だと思う。来年はまた、あの黄色い花が風に揺れる景色をたくさん見たい。

宮美遊

Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（3月中旬～下旬、順不同）

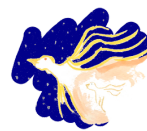


多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま他1名

クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。campfire communityにおきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



《連続小説》



金鶏鳥

宮美遊

幼少期 (十四)

明治から大正に変わった夏、六才の信男は兄の辰郎によく川へ誘われた。信男がバケツを持って、辰郎がドジョウすくい用のザルを持つのが常だった。ドジョウやハヨ（ハヤ）などの子魚取り、ミゾ貝やシジミ取りをするのだ。田んぼの横を流れる用水路には、田シジミが沢山（たくさん）いる。用水路や溝の堰（せき）を、そばにある板で塞ぐ。石垣を飛び降りて中に入り二人で水をバケツで掻き出す。すると石垣のすきまから水を求めて鰻や鯰やズガニが出てきた。二人は大喜びでそれを捕まえてバケツに次々ほうり込んだ。また二人でタツボ（タニシ）を取りに行くこともあった。家の周りには、沼田もたくさんあった。田植



えの後に成長した稲の足元にはタツボがいる。タツボを拾い、目籠（めかご）に山盛り入れて帰った。田の水口には3センチ位の鮒子（ふなこ）がウジャウジャいたので、それもよく捕って帰った。ある日も信男と辰郎二人は重いバケツを持ちながら、ニコニコと家に向かって歩いていった。「にーちゃん、イッパイとれたなあー」

「お母（かあ）が喜ぶに」

「お母の作るのは、うまいでなあー」

タツボはサザエのようにプリプリしている。美味しい料理を想像すると、重いバケツを持っていたも足取りは軽くなるのだった。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれから楽しんでご一読ください

挿絵：GPT-5

絵：落葉画廊

編集後記

この夏、照りつける日差しとともに、生活スタイルの変化に合わせて家の中を思い切った模様替えしています。長年「もったいない」としまいでいた物が山ほどあり、これを機に断捨離を：と思うものが、やはり捨てるには勇気がいります。そこで、中古品をやり取りできるサービスを使い、必要としないでさる方にお譲りすることにしました。真夏の青空の下、荷物を受け取った方が笑顔でお礼を言うてくださると、「こんな」縁もあるのだな」と心が温かくなります。そのおかげで、片付けの手も自然と軽くなってきました。（恩庄か）

おしらせ

★フラッペ中止のお知らせ

8月のフラッペはスタップの都合により中止いたします。ご予約くださっていた皆さまには申し訳ありませんが、またの機会にご参加いただければ幸いです。

★令和7年7月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。